

大の漁獲量を誇る宮崎内水面漁協（藤代須藤男組会長）も以前から稚魚の遡上遅れを指摘し、漁期の見直しや延長を県に求めてきた。同漁協の別荘一理事は「これまで遡上のピークは1〜3月といわれてきたが、現場では3〜5月という感覚の漁師が多い。県内でも遡上調査し、実際に即した漁期にしてほしい」と訴える。

一方、県は稚魚の遡上に関するデータや情報の不足から対応に苦慮する。現在、漁期は養殖業者や内水面漁協の代表らでつくる県シラスウナギ聯絡調整対策協議会の意見を基に県が決定。これまでは11月下旬〜12月上旬に漁の開始日を設定し、期間は105日間というケースが多い。国も

漁期は12〜4月という方針を示しており、大幅な変更は難しい状況だ。

また、県内の42養殖業者でつくる県シラスウナギ協議会が今年、県に漁期延長を求めたが、ウナギの資源減少を危惧する河川上流部の漁協などから理解が得られず見送られた経緯もある。一方、鹿児島県では12〜3月だった漁期が1カ月延長されている。

県水産政策課は「4月以降に県内で（稚魚を）採捕した例はない。情報不足で何ともいえないが、これまでのデータによると遡上のピークは12〜2月で需要のピークとも重なる。今後、今回のようなデータが蓄積されてくれば、県内での調査の必要性も出てくるので、他県の情報なども注

視する」としている。

県内の採捕量は今期（11月22日〜3月5日）、過去10年間で最も少ない2万1千トンにとどまった。